

# 東北比較文化学会(TACC)会報

May 1980 No. 1

事務局 青森県弘前市総町13-1  
編集兼発行者 山浦拓造

弘前学院大学英米文学佐藤研究室  
電話 (0172) 34-5211 内線 73

いあいえい

会長 山浦拓造

私は春になると必ず Shelley の "To a Skylark" を吟唱したくなります。その時 "Ode to the West Wind" にもありますように、地下にちちみこんでいた木の根、枝にねばっていた新芽が、忍従苦難を克服して、待望の春のいぶきに再生してくる勇ましい気魄を感じないではおられません。

ところで漱石の『草枕』にもありますように、この『ひばりに寄する詩』の1節が

前を見ては後へを見ては  
物欲しと、あこがるかなわれ  
腹からの笑ひといへど  
苦しみの、そこにあるべし。

うつくしき極みの歌に悲しさの極みの想、籠るとぞ知れ。

という訳になっております。そして、「物欲とあこがるかなわれ」の原文が And pine for what is not. であります。これは物質的なものではなくてこの世には実在しないもの→霊的なもの↓永遠性なものをあこがれると解すべきではないでしょうか。ですから、詩文にもありますように「星に憧れる蛾の欲望」であり、「朝に憧れる夜の欲望」とい

うわけであります。星は天空にあるもので、蛾——つまり地上の人間の手の届かない存在であります。だが上昇と追及の連続、無休の飛翔以外にひばりの生きる道はありません。そして空の世界であるから、現実的にはその理想に到達することは不可能であります。つまり我々の悲しみの世界から遙かに遠い何物かに憧れる熱望の連続ですが、この感懐は Shelley のすべての歌の中に活かされております。しかも彼の憧れは一般的人間的なものではなくて、新しい生命の中におどる恍惚への憧れに外なりません。そして Shelley の魂全体のスリルなしに生きてゆけないもの——人間ということになるのであります。私にはこの情熱が欠けているので Shelley に教えられるのでしよう。

さて時は春、万物の成長の初夏であります。しかし私達は「右・左・阿」して物欲しい顔ばかりしてよいのでしょうか。まっしぐらに向って上昇を続けて止まない追及者であるべきではありませんか。さて皆様もご存知のように最近「講座・比較文化」という大冊ものが出版されました。これは比較文化の広い分野や研

究方法を示唆するものと信じます。また最近『月刊ハーディ協会ニュース』(一九八〇・四・一〇)に載っている新入会員からの一言々のコラムの中で、理工学専攻の新会員が「ハーディの書く態度には科学の方法と相通するものがある」と述べ、「小説『テス』の運命観を、数字における写像の概念で説明してみたい」とありましたが、当然の提言かも知れません。私達は従来余りにも多く運命観・宿命論に支配され、あるいはショペンハワーの哲学観一辺倒ではなかったでしょうか。ご存知のようにハーディは元来が建築家ですから、彼の作品は建築学的に構成され、当然数理的な根底があるのではないのでしょうか。

型にはまらないで、比較文化研究の分野を開拓しようではありませんか。(一九八〇・五・一)

## 東北比較文化学会大会案内

第二回年次大会が六月七日(土)午後一時より、「えびすランドホテル」(福島市曾根田町二〇一六)で開催される。

### 次第

- 一、総会
- 二、研究発表
  - 1 日本語的観点から見た英語教育法 菅藤栄二
  - 2 『吾輩は猫である』における「遊

司会 芳賀 肇

菅藤栄二

菅藤栄二

「び」の問題 山形大学 飯島武久  
3 騎馬打毬とポロ 弘前大学 岩岡豊麻

三、シンポジウム 「比較文化における  
階層」 司 会 椎野正之

1 文学における「比較」という問題  
山形大学工業短期大学部

2 文化の中の相称と非相称（左行性  
を含む） 福島県立医科大学 森一

3 文化における言語  
弘前大学医療短期大学部

四、講演 恐怖のロンドン塔—イギリス  
国民性をのぞく— 西村清巳

弘前学院大学 山浦拓造

五、懇親会

## 心のゆとりと文化

「東北比較文化学会」の

発足にあたって

芳 賀 馨

福島県立医科大学に就任して、もう二  
年以上たった。その間、自動車で郡山や  
仙台へ毎週のように出向く。国道四号線  
や高速道路である。車を運転しながら最  
近はずいぶん情景に気付く。片道二車線以  
上の道路を走っているとき、追越車線が  
すーっと空いているのに、誰も追い越し

せず列をなしてゆっくり運転しているの  
である。せかせか追い越しても、目的の地  
に着く時刻は大して変わらないということ  
を、日本の運転者も経験的によく識って  
きたということなのである。つまり、日  
本人の自動車年令もやっとならぬに  
なってきたといえそうである。

私が自動車を運転し始めたのが昭和三  
十七年頃、弘前大学文学部講師の時期  
である。当時、弘前市内はどこでも駐車  
できたものである。その後十年ぐら  
い、自動車は早く走らなければ損だと日本人  
は考えていた。それから更に十年以上、  
自動車環境も変わったが、日本人の意識構  
造も実に大変な変革をとげたものであ  
る。

弘大赴任当時、弘大には英語教師は七  
名しかいなかった。その誰一人として、  
海外留学の経験はなかった。現在、弘大  
の英語教師は外人英語教師を含めて十七  
名、その三分の二が海外生活経験者であ  
る。人文学部助教授・渡辺淳一氏はパキ  
スタンに赴き日本語教育をしている。教  
養部助教授・山本博氏はアメリカの大学  
で日本文化を論じている。また、医療短  
大教授・西村清巳氏はアメリカの大学院  
で日本文化を講ずるため六月末に渡米す  
る。いずれも、外国人を対象に、英語  
で、日本語・日本文化を教授するのであ  
る。まさに、隔世の感である。一方、教  
養部助教授・太田敬雄氏は、今編集して  
いるテキスト、パティ・チャイエフスキ

の「プリンタズ・メジャ（植字工気質）」  
に関して、仕事の当初から作家と直接文  
通し、アメリカ直輸入の情報を活用して  
いる。

海外と日本、海外と東北の文化的交流  
が、今日では、首都東京を経由せずに直  
通できるほど、海外との距離がちまっ  
たのである。

以上の例は、私の友人のなかの、ほん  
の数例にすぎないが、このような友人の  
力が結集して、東北比較文化学会  
[Tohoku Association of Comparative  
Culture (略称TACC)]が発足しよう  
としている。

単一民族、単一言語の日本人が海外文  
化に接すること自体が、カルチュラル・  
インパクト Cultural Impacts の問題  
として研究の対象になるが、その逆のケ  
ースも同様である。また人間が成長し、  
イニエーション Initiation の礼洗を  
受けるときには、同一文化のなかでもこ  
の種の問題が存在するはずである。つま  
り、人間は物事を認識する際に、常に比  
較文化的発想に基づいているものなので  
あると私は考える。

明治以来、日本人は欧米文化を吸収す  
ることに汲々としてきたけれども、近年  
は、追越車線が空いていてもあくせくす  
る必要がなくなってきた。物質文明の高  
度の進展のため、日本人自らが日本文化  
をふりかえる余裕ができてきたし、心の  
ゆとりが諸文化活動への参加を可能に

し、さらには、日本文化の海外紹介への  
スプリング・ボードにもなってきたので  
ある。

「文学と映像」「日本文学翻訳作品研  
究」「日本文化の海外紹介」「オースト  
リア研究」「台湾研究」「郷土研究」  
等々各分野の研究者が協力して開発すべ  
きプロジェクトの数々を「東北比較文化  
学会準備会」は既に準備しているし、ま  
た興味深いテーマを見出していくことに  
なろう。

発足当初は一部の人間に冷たい白い眼  
でみられていた「青森県アメリカ学会  
(AASA)」が、数年を経た今日、白眼  
視した人々を嘲笑するが如き高嶺と化し  
た如く、東北比較文化学会に結集した若  
いエネルギーが、着実に発展することを  
祈念して稿を閉じたいと思う。

〔福島県立医科大学教授・外国語講座〕  
54年6月中旬「陸奥新報」

### 「パティ・チャイエフスキ論」

出版せよ

東北比較文化学会では本年四月、芳賀  
馨編「パティ・チャイエフスキ論」を出  
版した。目次を示すと

太田敬雄「Paddy Chayetsky…人と作品」  
佐藤憲和「Paddy Chayetsky のテ  
レビッドラムについて」佐藤幸正「The  
Big Deal」の「Printer's Measure」に

おけるヒューマニティについて」、町屋昌明「The Motherにおける母と娘の関係について」、芳賀馨「現代アメリカ演劇とChavelsky」、引地岳雄「Printers Measureの語法」

となつてゐる。その出版目的とするところは、編者の「あとがき」によれば「パディ・チェイエフスキのテレビドラマ「Printer's Measure (印刷工賃)」(開文社出版)を、大学教養課程用のテキストとして出版する運びとなつたのを機に、チェイエフスキの作家・作品論をまとめたのがこの「パディ・チェイエフスキ論」である。学生が自主的にテキストをよりよく理解しうるであらうという配慮からこの小冊子を編集したつもりである」となつてゐる。チェイエフスキ研究者には欠かせない資料を提供するものであり、日本で出版された最初の論文集である。学会では希望者に送料共八〇〇円で頒布することになつてゐる。事務局まで問い合わせ願いたい。

## 会 員 名 簿

(敬称略)

顧問 富田 望、石川 茂雄  
 盛田 総 辻 義人  
 会長 山浦 折造  
 副会長 花田 隆、芳賀 馨  
 理事 飯島 武久、須田 秀幸  
 山本 博、斧田 好雄、吉沢 荘七

西村 清巳、宇野 秀夫、佐藤 憲和  
 太田 敬雄、佐藤 幸正、小林 俊哉  
 岩岡悠紀子

監事 森 一、奈良岡 保  
 事務局長 西村 清巳  
 事務局員 佐藤 憲和、太田 敬雄

小林 俊哉、佐藤 幸正、岩岡悠紀子  
 会 員 推野 正之、石堂 哲也  
 丸山 茂、黄 文雄、藤原 康作

鍋島 能正、三保 忠夫、金子 一郎  
 栗原 靖、嶋田 裕司、町屋 昌明  
 安田 稔、新谷武四郎、高橋 理

相沢 敬久、米沢 紀、宮腰 武助  
 小関 正光、葛西 祐次、岩岡 豊麻  
 千葉 滋男、坂本 道直、滝口 秀子

芳賀 繁齊、須々田浩子、西村 剛光  
 豊島 秀範、田中 吟子、田中 清  
 清水 明、早川 正信、麻生 千明  
 小笠原 正

本会に入会を希望される方は会費(一般会員年額千円、学生会員年額五百円、賛助会員年額一口二万円)を事務局宛に御納入下さい。その際、住所・氏名・電話・勤務先をお知らせ下さい。

一 名称 本会は東北比較文化学会  
 (Tohoku Association of Comparative Culture)と称する。本会は事務局を弘前市稔町十三一 弘前学院大学英米文学科・佐藤研究室(電話〇一七二一三四一五二一内線七三)に置

く。  
 二 目的 本会は諸文化の比較研究を促進し、学術の発展・文化の交流に資すると共に、会員相互の親睦を図ることを目的とする。  
 三 事業 本会は上記の目的を達成するために次の事業を行う。  
 イ 大会(年一回)  
 ロ 会員の個人研究又は共同研究の促進・援助  
 ハ 会紙の発行  
 ニ 会員名簿の発行  
 ホ その他  
 四 組織  
 イ 会員 本会は本会の趣旨に賛同する人々を以て組織する。会員は一般会員・学生会員・賛助会員から成る。  
 ロ 役員 本会に次の役員を置く。役員任期は二年とする。但し再任を妨げない。会長一名 副会長若干名 理事若干名 監事二名  
 ハ 事務局 本会に事務局を置く。事務局長一名 事務局員若干名  
 ニ 顧問 本会に顧問を置くことができる。  
 五 機関  
 イ 総会 毎年一回、大会と同時に開催する。総会においては役員を選出その他重要事項を審議決定する。  
 ロ 役員会 必要に応じて会長が召集

し会務全般を処理する。  
 ハ 監事 本会の会計を監査し、総会に報告する。  
 六 会費 会費は一般会員年額千円、学生会員年額五百円とし、賛助会員年額一口(二万円)以上とする。  
 七 会計 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。  
 八 会則 会則の変更は、総会出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。  
 附則 本会則は一九七九年六月十六日より施行する。

## T A C C 行 事 記 録

〇第一回学会設立準備委員会(54・2・10(土))於弘前学院大学会議室 議題  
 一 学会設立の趣旨及び経過説明  
 二 学会名称及び会則について  
 三 役員人事に関して  
 四 当初の運転資金について  
 五 学生会員募集について  
 六 その他  
 出席者(花田隆・芳賀馨・宇野秀夫・太田敬雄・小林俊哉・佐藤憲和・岩岡悠紀子・佐藤幸正)  
 〇第二回学会設立準備委員会(54・3・31(土))於弘前大学 議題  
 一 東北比較文化学会設立大会につ

いて

二 研究発表について

三 学会設立大会の案内状の件  
四 プロジェクト紹介について

出席者(花田隆・芳賀馨・西村清巳・宇野秀夫・佐藤憲和・小林俊哉・佐藤幸正)  
○第三回学会設立準備委員会(54・5・3(土)於弘前学院会議室

議題

- 一 総会の研究発表者について
- 二 会則一部変更・修正について
- 三 案内状作成
- 五 プロジェクト紹介

六 学会員近況報告

出席者(花田隆・芳賀馨・西村清巳・宇野秀夫・吉沢荘七・佐藤憲和・太田敬雄・岩岡悠紀子・佐藤幸正)

○「東北比較文化学会(TACC)」設立総会(54・6・16(土)於弘前学院大学会議室

総会では花田隆氏が議長に選出され、学会設立経緯報告(佐藤(幸)、会則説明(太田)、役員選出(佐藤(憲))という順序で会が運ばれ、最後に会長に代って花田副会長の挨拶で終わった。総会に引き続き次の研究発表が行われた。

研究発表(敬称略)

町屋昌明 William Wordsworth: Lyrical Ballads の "Preface" (司会 宇野秀夫)

小林俊哉 Printer's Measure をめぐって(司会 石堂哲也)

森 一 五十音の分布を歴史的に

探る(司会 椎野正之)

早川正信 「路傍の石」における命名法について(司会 椎野正之)

飯島武久 日本文学の国際化と英語教師の役割(司会 芳賀馨)

なお、記念講演には山浦拓造氏の「近世イギリス金融制度の確立―劇『ベニスの商人』と絡んで―が予定されていたが、山浦教授御病氣のため、花田教授が一部代読した。懇親会は二五名の参加を得て「大門」で開催され、記念写真をとって散会とした。

○山本博氏朝報報告会(54・7・14(土))

「於白銀学園専門学校

弘前大学の山本氏が、この度一年近くの米国でのリサーチを終え、帰国されたので、青森県アメリカ学会との共催による報告会が行われた。

○西村清巳氏朝報報告会(54・9・8(土))

「於弘前学院会議室

弘前大学医療技術短期大学の西村氏がこの度、アメリカでの講義を終えて、帰国されましたので、アメリカ学会との共催で第一回例会を兼ねた報告会が行われた。

文化比較のステレオタイプ

西村 清 巳

東北でも有数の夏祭りに、津軽のネプタがある。

八月上旬、祭りの時期になると、ラジオ、テレビは様にネプタの読み方に触れる。「青森ではネプタ、弘前ではネプタ」というという俗説である。

豪華絢爛たる青森の人形ネプタと、情緒纏綿たる弘前の扇ネプタには、確かに異質なものがある。従って、ネプタVSネプタ説も、冗談半分のトピックとしては面白く聞けた。しかし、アナウンサーがあまり真顔で「青森ネプタ、弘前ネプタ」と説くのを聞くと、首をひねらざるを得ない。

ありていは、青森、弘前とも、ネプタという音に近い。

文化の比較に際して心すべきは、このようなステレオタイプであろう。

異文化の中でも、我々に比較的よく知られている等のアメリカに関して、この種の虚像は多い。アメリカの人種問題という点、真つ先に黒人を連想する。確かに黒人問題のアメリカに落とす影は大きい。しかし、人種問題イコール黒人問題ではない。

アメリカが、ベトナムから撤退したあとの戦後処理にも、人種問題がからんでいる。アメリカは昨年、すでに十億ドルを超える資金を使って、二十数方の難民をインドシナから受け入れた。これがアメリカに人種問題を引き起こさぬ筈がない。また筆者が昨年しばらく滞在したサンディエゴの大学に、おびただしい数のイラン人学生がいた。何せ、七八年だ

けでも、イランは三万六千人の学生をアメリカに送り込んだのである。テヘランのアメリカ大使館員人質事件以後、更にきびしい人種的緊張を生んでいるのはいうまでもない。

更に、隣国メキシコからの不法入国者の問題がある。アメリカはアンドキュメントド・ピープル、つまり「入国書類を持たぬ人」と婉曲な表現を使っているが、不法入国者には変りはなく、それだけに問題は深刻である。

現在アメリカには、三百万人から六百万人という、驚愕すべき不法入国者が在住しているという。この存在は、単にその違法性の故のみ問題とされるのではない。その安い労働力が、黒人などの労働力と競合することにより、新しい問題を引き起している。

ステレオタイプでは捕えられない、アメリカの人種問題である。

(弘前大・医療短大教授・TACC 事務局長)

事務局だより

○大会または例会で研究発表会(一人二十五分)を希望する方はレジュメ(B五版四百字詰原稿用紙二枚)を添えて事務局まで申し込まれたい。追って事務局から連絡致します。

○会員名簿作成中です。住所変更の方、新会員になられた方はお知らせ下さい。